

第 8 期大学院生 卒業エッセイ

船

第 8 期大学院生 池谷 真剛
(第 5 期 OB)

我が国および日本国民にとって、「船」は特別だ。我々がこうして文字を操れるのは、名もなき舟のおかげだ。江戸を生きる人々に世界を見せつけたのは、黒船だ。維新後一等国の仲間入りをできたのは、三笠および先人の奮励努力があったからこそだ。先の大戦で国運を託したのは、やはり船である大和と武蔵だった。

ここまでの 4 行で、読者は半数以下に減っていると思われる。が、まあ気にするまい。そんなことは、今に始まったものではない。話を戻す。とにかく船とは、水に浮遊する鉄の塊以上の存在であることは明らかだ。そして、歴史の話を抜きにしても、船というものはどことなく美しく、我々に特別な感情を喚起させるように思える。なぜか。これはあくまでも私見だが、それは、船が人に似ているからではないか。当然ながら、船は地に足がついていない。波は常に船体を洗い、風雨は構造物に容赦なく殴り掛かり、安定を許さない。大自然に抗う船の姿は、あまりにちっぽけだ。しかし、船は、載せる人を、荷物を、粛々と運ぶ。そこに人々は、自らの人生を重ね合わせるのかもしれない。

私は他の船よりも長く、小野ゼミというドックにいた。同時期にドックに入った船はおろか、後からドックに入った船も、とうに新たな航海に繰り出している。自ら選んだ工期延長ではあったが、焦燥感を覚えたことも一度や二度ではない。そして、果たして私の 3 年の工期延長についても良策であったかは分からない。ただ、船としての諸元はドックに入る前よりも向上し（そうであると信じたい…）、幸いなことに当面の船主は見つかった。

新たな船出に向けて今思うことは、次に帰港する際（寄稿？うまいことを言ってしまった）、ドックにいる所長および姉妹艦に恥ずかしくない航海をしたいということだ。それが、5 年に亘り面倒を見て下さった所長と、ドックに対する恩返しであると信じて。



ハワイにて、船の横で筋トレに勤しむ著者。